チェックリストを用いた本学英語授業評価の研究　序章

Introduction to English Class Assessment Using PACS

竹　野　　茂

本学ではFDのために学生の授業評価を開学の早い段階から行ってきているが、この評価は教員の資質向上のためのものであり、受講した学生にとっては結果が授業終了後に知らされるわけで受講した授業方法・内容が改善したかどうか、二度同じ授業を取らない限りの検証しにくいものである。単位を一旦取った授業は再度受講することはないのが普通である。そうなれば改善を願って記入された授業評価アンケートが本当に効力を発揮するかどうかは、結果を受け取った教授者の良心に委ねられているし、例え良心があっても技量不足で改善されないこともある。

多くの授業評価・自己評価は紙面ベースで行われるのであるが、本学で考えるPACS（Personal Assessment Check-list System）は、携帯電話機・スマートフォン・ＰＣなどの電子メディアを通してアンケートを採るシステムである。従来の紙面ベースのアンケートに比べ、データ処理が格段に高速化されるはずである。

本学で考えるPACSは、教員の資質向上の観点だけでなく、学生の到達目標の達成実現、学生自身の成績の現状把握、学習意欲の向上などをめざして導入しようとするものである。これらの観点をふまえて本稿では英語授業に特化してその応用を考えていく。

キーワード：授業評価、到達目標、チェックリスト、PACS、自己評価

目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　PACSの構想
Ⅲ　PACSシステムの使用
Ⅳ　今後の課題・問題点
Ⅴ　おわりに

Ⅰ　はじめに

平成19年度の宮崎公立大学の法人化に伴って、大学の中期目標設定とその検証が義務付けられた。それにともない各授業でも明確な目標設定とその成果の検証を義務づけられることとなった。人間を育てる教育の現場でも学生の質的な成長を目に見える形の成果として示す必要がある。教育の質を単純な数値という形で示すことは大変困難なことである。テストでの成績があるではないかと指摘されるが、果たしてそのテストで全人的で包括的な評価が可能かという問題をはらんでいる。テストで計測される能力には限りがある。他の分野だけでなく外国語教育の研究にも量的研究と質的研究がある。量的研究は数値がはっきりと出てくるのでより客観的と思われるが、研究方法も進歩し量的研究だけでなく質的研究が多く世に問われるようになった。ここでは量的研究と質的研究を論議する場ではないのでこれまでにするが、研究の概念的な違いや具体的な研究方法については、竹内・水本（2012）が詳しく論じているのでそちらを参照すべきである。

PACSの基本的な考え方は、質的研究の手法に近い考え方である。数値も使用するが、学生の自由記述を重視する考え方を含んでいる。EU（European Union）内で言語運用能力を重視し、欧州評議会（Council of Europe）が出したThe Common European Framework of Reference for Languages（『ヨーロッパ言語共通参照枠組み』、以下CEFR）の考え方に多くを学ぼうとしている。国際交流基金が出版している『ヨーロッパにおける日本語教育とCommon European Framework of Reference for Languages』にも以下のように示されている考え方に基づいた言語習得の枠組みである。

「CEF(注1)は、現代言語分野でのカリキュラム、シラバス、試験、資格制度を開発するにあたっての共通の基盤を提供することを目指すものですが、CEFを実際の言語学習に用いるためには、European Language Portfolio（ELP）があります。これは、1 Language passport（言語パスポート）：CEFの共通参照レベルで定義された６レベル(注2)に沿って言語能力を記入し、提示できる。2 Language biography（言語学習記録）：学習者自身が学習過程や達成度の自己評価を行い、今後の学習計画に活用する。3 Dossier（資料集）：学習成果を保管する、の３点から成っており、ヨーロッパ各地で独自の開発が進められているところです。このCEFやELPはヨーロッパ言語に限られたものではないため、日本語に関してもシラバスや能力基準を開発する際に参考になることも多く、今後の日本語教育発展のためには、これらを活用していくことを考えていく必要があります。」

（注１：この引用ではCEFRをCEFと省略している。また下線部と注のマークは筆者による。）

（注２：図１参照；http://www.enjoyenglish-mag.com/2009/10/common-european-framework-of-reference-for-languages-cefr-equivalence-table/）

Common European Framework (Council of Europe)	A1 (Breakthrough)	A2 (Waystage)	B1 (Threshold)	B2 (Vantage)	C1 (Effective Operational Proficiency)	C2 (Mastery)
Escuela Oficial de Idiomas (Spain)		Nivel Básico 2°	Nivel Intermedio 3°	Nivel Avanzado 5°	C1 Ciclo superior	
ESOL (English for Speakers of Other Languages – University of Cambridge)		KET (Key English Test)	PET (Preliminary English Test)	FCE (First Certificate in English)	CAE (Certificate in Advanced English)	CPE (Certificate of Proficiency in English)
IELTS (International English Language Testing System - British Council)		IELTS 3.0	IELTS 3.5 - 4.5	IELTS 5.0 - 6.0	IELTS 6.5 - 7.0	IELTS 7.5+
TOEFL (Test of English as a Foreign Language - Internet Based Test)		TOEFL IBT 38-56	TOEFL IBT 57-86	TOEFL IBT 87-109	TOEFL IBT 110-120	
TOEIC (Test of English for International Communication)	10-549		550-755	756-879	880-973	974-990
ALTE (Association of Language Testers in Europe)	0 Elementary	1 Pre-Intermediate	2 Intermediate	3 Upper-intermediate	4 Advanced	5 Upper-advanced
BULATS (Business Language Testing System)	21-39		40-50 / 51-59	60-67 / 68-74	75-79 / 80-84 / 85-89	90-93 / 94+

図１：CEFによる６レベル

PACSのシステムも３つの部分から成り立っている。（１）シラバスの記述とレポートなど学習記録の管理ができるMoodleというWebサイトを利用したContents Management System（CMS）と呼ばれるシステム、（２）MaharaというWeb上でファイル等をフォルダという概念で管理ができるポートフォリオ・システム、それと（３）携帯電話・スマートフォン・ＰＣなどの電子メディア端末でアクセス可能なWebサイトを利用した自己評価システム（PACS）の３つから構成されている。CEFRの詳しい研究が進んでいないPACSの構想段階で、図らずも結果的にCEFRの考え方に近いものになっていた。

本学中期目標の「基礎的コミュニケーション能力の養成」という項目の中で、次のように謳われている。

「主体的な学習を促すための基礎力、大学での専門的な学習に不可欠な学術的な基礎能力と現代社会に必要な実践力を養成するため、英語とICT（情報通信技術）の早期集中学習を少人数双方向の授業で行う。

それぞれの学習内容の具体的な目標を設定し、到達度が確認できるチェックリスト・システムPACS（Personal Assessment Check-List System）を構築する。

PACSの90％の項目において２段階レベル・アップを達成することを目指す。また、PACSの内容と評価の尺度としての信頼性・妥当性を高めるために、評価方法の改良・改善を重ねる。

（ア）英語教育では、学生一人ひとりの四技能（読む・書く・聞く・話す）のさらなる向上を目指す。

（イ）情報教育では、文書処理・表計算・インターネット利用法等の情報リテラシーの修得を目指す。」

また、チェックリスト・システムについての研究項目では次のように説明されている。

「チェックリスト・システムPACS（学生と教員の双方が、英語とICT（情報通信技術）について個々の能力に応じた学習内容の具体的な目標を設定し、学生の到達度を確認すると同時に教員の授業改善につなげる教育プログラム）のチェック項目について調査研究する」

本学ではFaculty Development（FD）のために学生の授業評価を開学の早い段階から行ってきているが、この評価は教員の資質向上（特に授業面での向上）のためのものであり、受講した学生にとっては結果が授業終了後に知らされるわけで改善したかどうか、二度同じ授業を取らない限りの検証しにくいものである。

本学で考えたPACS（Personal Assessment Check-list System）の研究及び導入は、教員の資質向上（FD）活動だけでなく学生の到達目標の達成、自己の成績の現状把握、学習意欲の向上などをめざしたものである。本稿ではこのPACSのシステムの構想および英語の授業評価への活用などについて論じていきたい。

Ⅱ　PACSの構想

中期目標におけるPACSの事業目的には次のように記されている。

「いわゆるゆとり教育の弊害により、入学時の学生の学力の差は大変大きく、本学の専門的な学習に不可欠な基礎力を養成する必要がある。同時に、学力の高い学生についても更にその能力を伸ばさなければならない。そのため、英語とICT（情報通信技術）について、個々の能力に応じた学習内容の具体的な目標を設定し、到達度が確認できるチェックリストシステム・PACSを構築する。PACSの90％の項目で、２段階レベル・アップを目指す。」

「教育の基盤となる研究を推進するために、カリキュラム及び教授法・教育方法の改善充実という視点から、チェックリスト・システムPACSのチェック項目に関する調査研究を行う。」

PACSプロジェクトの目的は、英語とICTに教科を絞っている。その理由としてあげられるのは、この２つの教科は基本的にスキルを修得するもので、目標設定が行いやすいということで対象

が絞られた経緯がある。他にも応用はきくと考えられたが、年限が限られた導入計画であったので、効果が得やすい教科にしぼって研究を開始したといってよい。

その構想は、学生の自主的能力を向上させることに主眼を置いたものであった。「評価は教授者が行うもの」という考えを根本から問い直すために始まったと言ってよい。そもそも評価とは何のためにするのか成績処理のためにやむなく学生の優劣をつけるというものなのか、評価をとらえ直すことからプロジェクトは出発した。

1　評価の定義

国公立大学の法人化にともない多くの大学の評価基準として数値目標が示されることが多かった。特に英語教育においては、「TOEICスコアが○○○点以上」という具合に、企業において盛んに用いられる資格試験TOEICスコアで数値目標が示されることが多かった。TOEICは本学においても、学生の任意の意志において学生自らの英語力を測る参考データとして受験を促進しているテストである。そして多くの学生が受験するようになっている。学生一人一人と面接する中で気づかされる問題は学生の英語力とTOEICスコアが必ずしも一致しない場合があることである。詳しく調査していないが、経験的に言うと、6ヶ月以上の英語圏への海外研修・中長期語学留学などの経験があり、運用能力が多少あると思われる学生のTOEICスコアは適性に思えるが、TOEICスコアを伸ばすための学習だけを行ってよい成績を修めた学生のスコアは多少運用能力の信憑性が薄い印象を受ける。また逆に運用能力が高いと思われる学生なのにスコアに表れてこない場合も少ないが見受けられる。これは印象論なので、詳しく調査研究する必要がある。どちらにしてもTOEIC受験に対する慣れも関連があるように感じられる。

そこで、PACSプロジェクトチームの考え方は、評価することが目的ではなく、評価をどう生かすかという観点での発想を重視した。チェックリストの中での具体的な能力に関する記述に最も適合すること、つまり、自分の能力を言葉で説明できるようにすることに主眼を置いた。資格試験でのスコアを完全に無視するというのではない。日々の学習の成果としての自分の能力を説明できた上で、スコアとの整合性が持てるような自己評価を目指したのである。

特に、次の観点を中心に据えて、システム構築とチェックリストの精査を考えた。

1．学生の自己評価力と自己認識力（現状認識力）をつけること。

2．学習を生涯のスパンで考えた時に「学生による学生のための学びの保証」につながるものであること。

3．自律学習の獲得。

4．チェックリスト作成の労力の軽減。特に教授者の負担軽減。

あたかも階段を上るが如く、説明に示されている能力を獲得していくと自分にはどのような能力が身につき、次に何をしなければならないのかを考えようとすることに主眼を置いた。TOEIC

スコアもスコア自体ではなくそのスコアの意味する説明標記に目を向ける必要があるが、数値標記のマジックであろうがスコア自体が一人歩きする傾向にある。しかし、TOEICスコアの説明標記はすこし大まかすぎて具体的な内容が分かりにくい。日々の授業の中での目標とする細かな能力について明確に標記すると学生にとって分かりやすくなるという前提に立って、評価項目（チェックリスト）の設定をしようと考えたのである。

２　実施状況報告

平成19年度の実施状況については以下のように報告している。

1．PACSを実践する場合の位置づけについて議論し、まずは英語、情報の中でも基礎・基本となる必修科目に適用することにした。
2．英語、情報の教育方法に関して話し合われ、個々の学生によっては対面による指導も重要となるため、システムだけに頼らない対面による指導を含むことになった。
3．英語、情報における現在の必修科目のシラバスを確認し、現在の教育目標を調べた。
4．外部評価として用いられる資格試験や検定試験を調査し、その内容について調べた。
5．学内教員向けに情報に関する各専門分野での活用や必要性についてアンケートを実施した。
6．学生が自己評価を行うために、最終的な学習目標を学生が理解できるグリッド状の学習目標を整理して提示することになった。
7．上記までの調査をもとに情報においては、1、2年次の必修科目のチェック項目のたたき台となるシートを作成した。
8．英語に関して非常勤講師と新しい教科書の指導や今後のチェックシート作成について話し合い、平成20年度に具体的な作成にあたることになった。

これを受けて20年度の中間報告は以下のようなものである。

（1）　H20年度前期において、英語における段階別学習目標（グリッド）の考え方について数回にわたり検討を重ね、考え方の方向性についてある程度の合意を見た。（4月～8月）
（2）　後期の英語Ｂにおけるリーディング、ライティング、グラマーの3つのモジュールについて、シラバスに照らし合わせながらチェックリストの検討、作成を行った。（9月～10月）
（3）（2）で作成したチェックリストを英語Ｂの各モジュールにおいて実施中である。授業の進度により微調整をしながら、チェックリストを訂正し実施している。（10月～）
（4）　英語は習熟度別に基礎、中級、上級の3つのカテゴリーのクラス編成を行っているが、

今回のチェックリストによるアンケート実施は本格実施に向けてのパイロット研究的な要素を持っており、３つのモジュールそれぞれ中級から１クラスずつを抽出して実施している。(10月～)

（５）クラスの抽出にあたっては、英語の担当教員が常勤の教員であることを考慮した。細かな指示の伝達等が生じたり、出張による授業時間の変更等が生じたりした場合に、把握し易く対処もし易いことも考慮した。(10月～)

（６）データの収集については、授業前、授業後にほぼ同じ内容のアンケートを実施し、時間内での変化を見る。中長期的なアンケートも実施する予定である。データの集計については各クラスに学生１人を割り当てて集計に当たらせている。(10月～)

（７）（６）の実施方法については前期のICTでの実施に合わせた形で行っている。(10月～)

これらの実施要領および状況報告はPACSプロジェクト全体に対するものであるので、英語及び情報の科目についての記述になっている。本稿で言及するのは英語の部分に限定される。

３　パイロット調査の実施方法及び実施と問題点

3.1　パイロット調査１　2008（平成20）年後期

2008（平成20）年度の後期に、１年生を対象とした必須授業「英語Ｂ」のリーディング、ライティング、グラマーのそれぞれのモジュール１クラスずつに対してのPACSアンケートは紙ベースで実施された。12回の授業に対して毎回授業前・後に実施された。12回のうち初回、中間の７回目あたり（授業によって前後した）、最終回の３回は同じ内容の約50問に亘る授業全体に対する項目を網羅するアンケートを授業の前半または後半の10分程度で実施した。この３回を除く通常の授業では事前６問、事後に事前に実施したのと同じ質問項目６問と記述２問のアンケートを受講学生に記入させた。記述項目以外のチェック項目は１～６の６段階で記入させた。（Appendix Ａ参照。）調査は個人の進捗状況が把握できるよう、学生には個人データが流出にないよう慎重に取り扱うことに留意する旨を書面及び口頭で説明し納得してもらった上で、無記名ではなく記名をさせた。（Appendix Ｂ参照。）集計はそれぞれのモジュールに対して１名の学生アルバイトに集計させた。

問題点として次のようなことが挙げられる。より多くのデータを得ようと欲張ったため、それぞれのモジュールの各週のシラバスに合わせ事細かく項目を設定し実施した。そのため、毎回の授業においてトータルで10分程度の記入時間を取り、実施対象になったクラスの教授者および学生には時間的にも回答労力についても多大な負担をかけた点が指摘される。また、データ量が多い分集計にも時間を要し、学生へのフィードバックができなかった点も指摘される。３つめの問題点として、PACSの事業目的にある「PACSの90％の項目で、２段階レベル・アップを目指す。」

というのは６段階の計測値で２段階ということを意味するのであるが、事前の調査ですでに高い値を記入した学生について、２段階アップは不可能である点も指摘される。したがって、チェック項目設定の精査が必要である。

3.2　パイロット調査２　2009（平成21）年前期

2008（平成20）年後期のパイロット調査１の反省を踏まえ、2009（平成21）年前期の１年生を対象とした必須授業「英語Ａ」のリーディング、ライティング、グラマーのそれぞれのモジュール１クラスずつに対してパイロット調査２を紙ベースで実施した。この調査では、初回、中間、最終回の３回に絞って項目数も押さえて実施した。

パイロット調査１に比べ、教授者及び受講学生への負担は軽減された。

3.3　チェックリストの課題

紙ベースでのパイロット調査を２期にわたって実施し、チェックリストの設定の仕方について基本的な考え方ができたが、さらなる精査が必要になった。細かすぎるチェックリストを作成してしまうと、テキストの変更やシラバスの変更などによりチェックリストはその都度変更を余儀なくされる。したがって、より普遍的なチェックリストを作成しなければならない課題が生じた。

この課題はコンピュータ・ベースのチェックリスト・システムを構築する上での大きな問題点である。より普遍的なテンプレートが完成すれば、簡単に複写して使え多少の変更を加えて発展進化させることができる。コンピュータ上でデータ化できれば、学生はいつでも入力したデータにアクセスでき進捗状況を把握しながら自らの目標達成に向けた具体的な取り組みができるであろう。

また、シラバスとチェックリストとの緊密な関連性が必要である。１コマ１コマの授業目標を明確にし、チェックリストに反映する必要がある。その上での要件は同じ授業を受け持つ複数の教授者の意識統一と細かな進度調整である。後で述べるが、ＰＣなどの電子メディア端末でアクセス可能なWebサイトを利用した自己評価システム（PACS）のプロトタイプでは進度の違いなどに柔軟に対応できるものになると思われる。しかし、同じ授業目標を共有することは避けられない要件である。

４．システムの構築

パイロット調査を実施する一方で、2009年度からMoodleサイト（図２）の構築やMaharaサイト（図３）の設定も平行して行った。学生のポータル・サイトにログイン認証すると上記の２つのサイトに認証なしに進めるシステムにするためCAS（Central Authentication Service）というシン

図２：Moodleサイト

図３：Maharaサイト

グル・サインオン認証を設定した。認証システムが複雑であると使い勝手が悪いのでシステムの使用率が下がることを考慮した結果の仕様である。MoodleサイトとMaharaサイトはコンテンツの性質上ＰＣスマートフォンからのアクセスに限られる。スマートフォンでもアクセスできるが使い勝手はＰＣに劣る。

Moodleサイトはシラバスの入力を一度行えば修正も簡単であるし、年度ごとにそっくりコピーもできる。前年度のシラバスをコピーした上で、細かい部分の修正しシラバスを進化させることができる。出席管理やレポート提出もできる多機能なコンテンツ管理システム（CMS）である。英語と情報以外の授業でも使用できるようになっているので、英語、情報以外の教授者も実際に使用している。多機能な分、複雑な使用方法も可能である。教授者も受講者も使用に慣れてくると様々な機能を使いこなせる可能性もある。しかし、設定は一度に行ってもよいが、設定した機能を最初から一度にすべて使わせようとすると使用方法を説明するのにかなり時間を要してしまうので、少しずつ機能を追加して使用するようにするとよいであろう。例えば、シラバスの閲覧と出席管理機能を手始めに使ってみる。その後、ファイルのアップロードというように１回の授業に一つずつ増やし毎回必ず使用するように授業を組み立てる。そうすると、使用方法に慣れ忘れにくくなる。使用頻度の低い機能はできるだけ避けるほうが混乱を招かず、システム利用が長続きする。

Ⅲ　PACSシステムの使用

１．質問項目入力の実際

図４は、教員の管理画面にログインした直後の画面である。

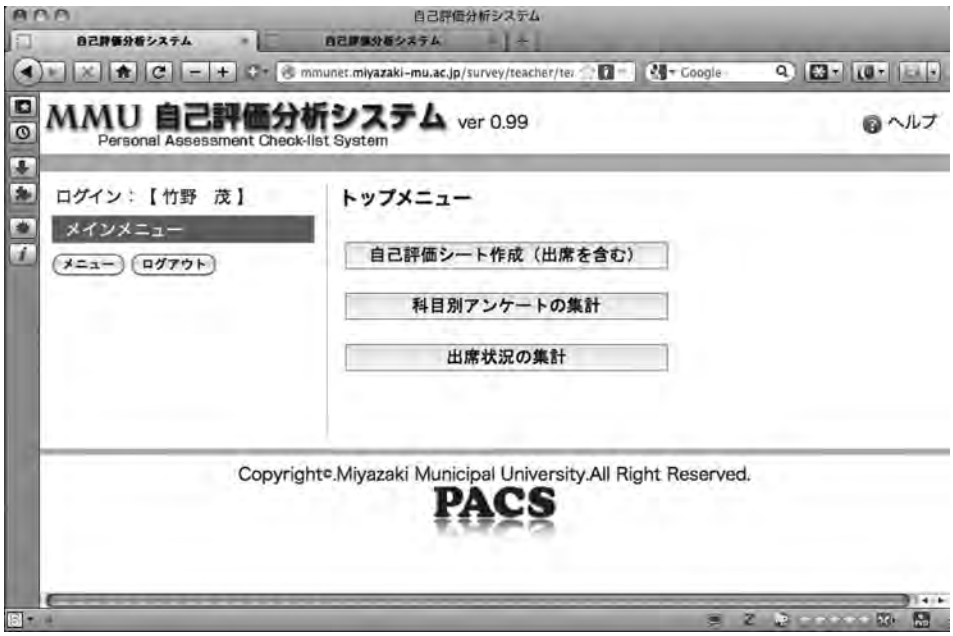

図４：ログイン直後の画面

「自己評価シートの作成（出席を含む）」のボタンをクリックすると、図５の画面になる。図５の画面からアンケートを作成したい教科を選択する。筆者の場合、必修英語を担当しておらず、選択教科（一部教職必修科目）である。例として、「英語科スピーチ指導法Ⅳ」のラジオボタンを選択し「詳細表示」のボタンをクリックすると、以下の図６の画面になる。

図６の例ではすでにいくつか設定済みになっていることが分かる。初めてアクセスした場合には図のように表は作成されていない。その場合には、「タイトルの追加」ボタンをクリックし、図７に進む。

図５では、（１）授業日、（２）１セメスター15回のうちの何週目のコマか、（３）コマのタイトル、（４）授業時間の設定（あるいはサイトにアクセスし回答できる時間設定）、（５）出席確認のためのパスワード設定、（６）出席確認のためのパスワードを複数発行した場合の個数設定、（７）人数分の異なったパスワードをcsv（コンマ切りファイル）でダウンロードするためのボタン（８）出席を取るかどうかの設定、（９）学生が質問項目に答えた後でないように間違いがないかを確かめるかどうかの設定、(10) 質問ヘッダ：学生の質問項目回答画面においてタイトル部分にその回についての全体説明等があれば個々に記入することができる。

出席確認パスワードは受講生一人一人に別のパスワードを割り当てることもできるし、そのクラスに出席したもの全員に共通の１つのパスワードを発行することができる。学生個人個人のパスワードを発行した場合には、そのパスワードを個人用に印刷し、一人一人手渡ししなくてはなら

図５：アンケート作成画面への入り口

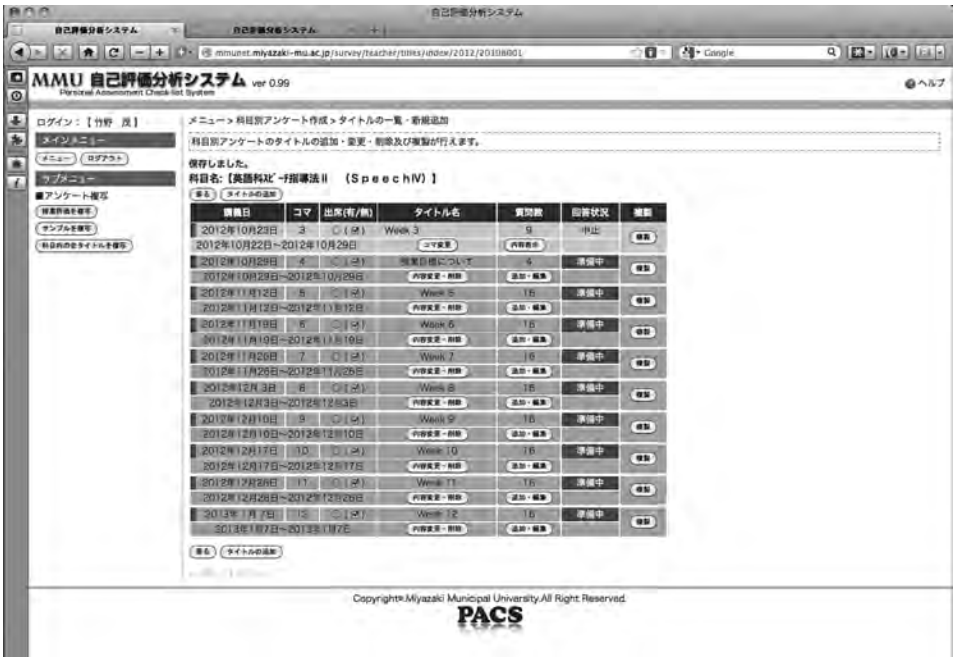

図６：タイトルの追加、タイトル内容変更、質問項目追加への入り口画面

図７：各コマのタイトル設定画面

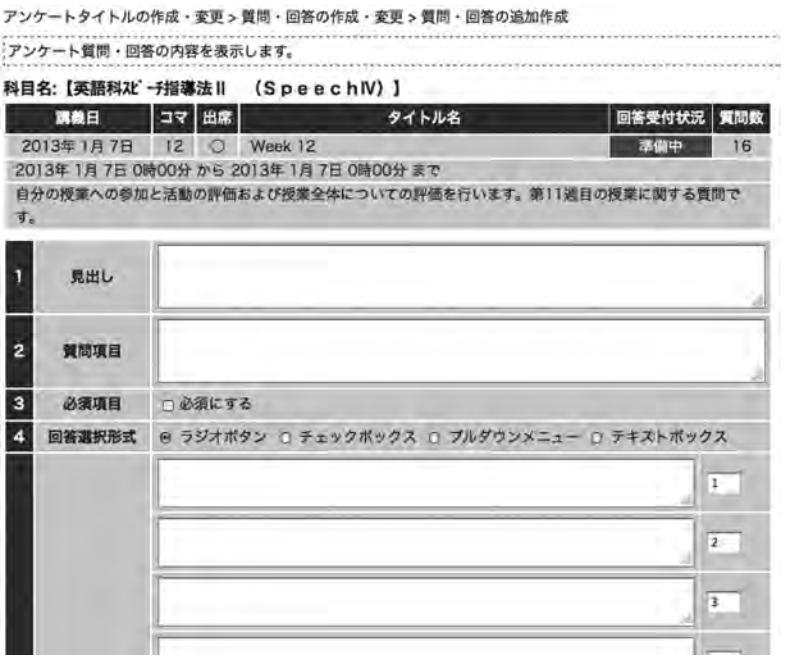

図８：アンケートの質問・回答作成画面

ない手間がかかる。特に受講者の多いクラスでは非効率的と言える。支障がない限りその授業時間共通のパスワードを知らせることでよいのではないか。Moodleにおいても出席確認パスワードで出席確認ができる。筆者がMoodleサイトの出席確認を使用した際の支障はみられなかった。タイトル部分は「質問タイトル」となっているのでわかりにくいが、設定する授業コマの中心テーマなどを入力しておくと図６において内容が分かりやすい表記になる。筆者の場合、第何週目の授業かということを明記しただけになっている。

上記の10項目の設定が終了したら、「設定の確認」ボタンをクリックし、記入内容が記載された新しいページが表示されその内容を確認した上、「保存」ボタンをクリックし確定させる。この時「保存のみ」ボタンとともに「アンケートスタート（収集開始）」ボタンも表示されるのでクリックしないよう気をつける必要がある。ここで「アンケートスタート」をクリックしてしまうと項目設定しないまま収集だけ開始してしまい結果が残せない。いったんスタートしてしまうとこのタイトルは編集不可能になる。つまり質問項目の追加ができない。慎重に「保存のみ」を選択して、図６のタイトル一覧にもどり表中の右から３番目のコラム「質問数」の下の「追加・編集」ボタンをクリックすることにより、図８の画面に移行する。

図８にみられるように、（１）見出し項目、（２）質問項目、（３）必須項目、（４）回答形式選択の４つの部分がある。（１）見出し項目に指示文を記入する。（２）質問項目には問いたい質問を記入し、（３）で、その回答を必須にするかどうか決定する。必須にチェックするとこの質問に学生が回答しないと次の質問に進まないようになっている。（４）の回答形式の部分は（１）ラジオボタン、（２）チェックボックス、（３）プルダウンメニュー、（４）テキストボックスの４つの選択肢がある。（１）ラジオボタンは多項目から１つ選択、（２）チェックボックスは多項目から複数選択、（３）プルダウンメニューはラジオボタンと同様、多項目から１つ選択である。ただし（１）と（３）の違いは、（１）では項目がすべて見えているのに対して、（３）はプルダウンすると選択肢が表示されその内の１つを選択する形になる。（４）は自由記述設問を設定するものである。（１）から（３）の形式を選んだら選択肢を下の複数のコラムに記入することになる。すべき記入し終わると、「確認」ボタンをクリックし確定させる。

次の図９は図６から質問数の「追加・編集」ボタンをクリックした際、既に設定済みの場合に現れる画面である。

このシステムの優れている点は、質問項目を設定すると汎用性のある質問については「お気に入り」として登録し何度でも同じものを使用できるという点である。この「お気に入り」機能は１つ１つの質問項目にも使用できるし、質問用紙全体にも使用できる。また、作成中、前項目と同じような質問を繰り返す場合便利なのは「複写」ボタンである。質問項目ごとに（１）変更、（２）削除、（３）複写、（４）お気に入りへ複写の４つのボタンがある。複写したものには質問の文章の後に「のコピー」という文字が追加されているので、「変更」ボタンで詳細を表示させ編集する必要がある。すべて記入・編集が終了すると、戻るボタンで図６に戻り、「タイトル名」というコラム

図９：アンケートの質問・回答作成・変更画面

の「内容変更・削除」のボタンをクリックし、一度「設定確認または削除選択」画面を表示させた後「設定の確認」ボタンをクリックする。すると前述の「アンケートスタート（収集開始)」ボタンが出現するので、ここをクリックしスタートさせる。

注意点が一つある。それは前述の通り、一度アンケートがスタートしてしまうと項目の変更は不可能である。これも途中で中止して編集ということもできない。中止すると集計途中で終了し、完全なデータがとれなくなる。失敗したアンケート（あるいは中止したアンケート）は図６の表に残り、消すことはできない仕様である。失敗が続くと図６の表が失敗の残骸で汚れて見にくくなるので、質問項目を慎重にチェックしてからアンケートをスタートさせる必要がある。

以上がPACSシステムの一番主要な「自己評価分析システム」の入力方法の説明である。

２　「自己評価分析システム」の運用

2011年にはベータ版システムの完成に至ったが、まずは教員画面の細かな調整に手間取った。

PHP言語で書かれているがデータベースとの遣り取りなどプログラム上のバグがあった。また、学生IDと受講授業のデータの引き継ぎの問題が生じ、プログラムに学生のデータが反映されないまま、具体的な稼働に至らなかった。2012年11月現在、「自己評価分析システム」の教員の質問項目作成部分は一応の完成をみた。学生IDと受講授業のデータの引き継ぎ問題は解決されたようであったので、いよいよ稼働実験を行った。結果は学生のログイン画面から学生がログインできない症状が出て、これが解消されていない。現時点では原因調査中である。恐らくLDAP認証がうまく行っていないのであろうということだった。

残念ながら、本稿では実際の運用実績については論ずることができなかった。しかし、「自己評価分析システム」の教員の質問項目作成部分は正常に稼働し、使い勝手もまずまずというところであった。設定には多少の慣れが必要である。特に、項目名を見ただけで何を設定するのか分からないまたは誤解を生じるような表記が散見される。

Ⅳ　今後の課題・問題点

2008（平成20）年度から始まったPACSプロジェクトは大詰めを迎えている。しかし、課題のいくつかは残されたままである。「自己評価分析システム」の実験運用も行われておらず、完全運用にまではほど遠い。実験運用が開始され細かな修正点を改善しなければならない。

システム自体の問題もあるが、もっとも大きな課題は質問項目の精査である。今後カリキュラムの大きな変化が予想されているし、パイロット調査の時の項目はもっと理論的裏付けに基づいたものに洗練しなければならない。しかしこれも一朝一夕にはいかないであろう。「自己評価分析システム」の完全運用の中で試行錯誤を繰り返しながら、よりよいものを作り上げる必要がある。本学独自の建学理念に基づいたディプロマポリシーの確定、それに伴う授業目標設定・到達目標設定が不可欠である。

Ⅴ　おわりに

本稿では2007（平成19）年度から取り組んできたPACSプロジェクトの構想からシステム作成の過程、実際の運用について述べた。PACSの構想の中で「評価」のとらえ方の重要性を考えさせられた。評価は何を測定するものか、その目的は何か、これらの疑問に答えられなければPACSはただの箱になってしまう。

改めて本稿でプロジェクトの行ってきたことの一端をまとめることにより、評価を取り巻く問題点を考え直すことできた。システム自体の完成は間近であるが、その魂を入れるためにはさらなる研究が必要となることも明らかである。また、PACSプロジェクトの当初の目的を再確認できた。PACSプロジェクトの目的は、ただ単なる評価そのものではなく、評価が生み出す学生の学習

面における自主性の向上、目標設定、目標達成、学ぶ楽しさや目的意識の醸成を意図している。確実なスキルの向上を側面から支えるペースメーカーとしての役目を担うことがPACSプロジェクトの究極の目標なのだ。この目標が達成されてこそ本学で学ぶ学生の出口を保証することにつながると確信する。

参考文献

橋本満弘、石井敏編（1993)「英語コミュニケーションの理論と実践」 桐原書店。
高島英幸編著（2005)「文法項目別英語タスク活動とタスク34の実践と評価」 大修館書店。
松畑熙一編（1994)「英語コミュニケーション能力評価実例事典」 大修館書店。
馬場哲生編著（1997)「英語スピーキング論」 桐原書店。
小川邦彦、古家貴雄、手塚司、鷹野英仁共著（1997)「オーラル•コミュニケーションテストと評価」一橋出版。
原田昌明（2000)「英語の言語活動WHAT & HOW」第６版　大修館書店。
小田勝己（2001)「総合的な学習に適したポートフォリオ学習と評価」 学事出版。
http://www.jpf.go.jp/j/publish/japanese/euro/

Appendix A：Grammarのチェック項目例（一部）

宮崎公立大学PACSプロジェクト

学籍番号（　　）氏名（　　）

第1回　自己評価シート

※この自己評価は、あなたの現在の状況を理解してもらい、この講義に目標を持って取り組んでもらうために行うもので、成績に使用するものではありません。操作に自信があるかどうかを、6段階で「6：自信がある」から「1：自信がない」の中から答えてください。

科目名	NO	内容	内容(Can-Do Statements)	該当する番号を○で囲んでください。
英語B (G)	001	General	I can understand what makes a sentence grammatically correct. どのようにすれば文法的に正しい文章にすることができるか知っている。	自信がある← 6 5 4 3 2 1 →自信がない
英語B (G)	002	General	I can understand parts of speech. 品詞が理解できる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	003	General	I can write grammatically correct sentences. 文法的に正しい文章を書くことができる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	004	U6	I can use the present tense correctly. 現在時制正しく使うことができる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	005	U6	I can make correct sentences using the present progressive. 現在進行形をつかって正しい文章を作ることができる。	自信がある← 6 5 4 3 2 1 →自信がない
英語B (G)	006	U6	I can use the past tense correctly. 過去時制を正しく使うことができる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	007	U6	I can make correct sentences using the past progressive. 過去進行形を使って正しい文章を作ることができる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	008	U6	I can understand the present perfect tense correctly. 現在完了時制を正しく理解できる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	009	U6	I can make correct sentences using the present perfect tense. 現在完了時制を使って正しい文章を作ることができる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	010	U6	I can make correct sentences using the present perfect progressive. 現在完了進行形を使って正しい文章を作ることができる。	自信がある← 6 5 4 3 2 1 →自信がない
英語B (G)	011	U6	I can understand the past perfect tense correctly. 過去完了時制を正しく理解できる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	012	U6	I can make correct sentences using the past perfect tense. 過去完了時制を使って正しく文章が作れる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	013	U6	I can make correct sentences using the past perfect progressive. 過去完了進行形を使って正しい文章を作ることができる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	014	U6	I can make sentences using correct words, considering their parts of speech. 品詞を考慮しながら、正しく単語を使って文章が作れる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	015	U1,U2	I can understand the functions of the nouns. 名詞の機能を理解できる。	自信がある← 6 5 4 3 2 1 →自信がない
英語B (G)	016	U1,U2	I can use the nouns correctly. 名詞を正しく使うことができる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	017	U3	I can understand the functions and the meaning of the articles. 冠詞の機能と意味を理解できる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	018	U3	I can use the articles correctly. 冠詞を正しく使うことができる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	019	U4, U5	I can understand the functions of the verbs. 動詞の機能を理解できる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	020	U4, U5	I can understand the usage of the verbs. 動詞の使い方を理解できる。	自信がある← 6 5 4 3 2 1 →自信がない
英語B (G)	021	U4, U5	I can make correct sentences with correct structures, using the verbs. 動詞を使って、正しい文構造を持った文章を作れる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	022	U7	I can understand the collocations of the verb and the nouns. 動詞と名詞のコロケーションを理解できる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	023	U7	I can make sentences including the collocations of the verbs and the nouns. 動詞と名詞のコロケーションを含む文章を作ることができる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	024	U8	I can understand the functions of gerund. 動名詞の機能を理解できる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	025	U8	I can understand the meaning of the sentences including gerund. 動名詞を含む文章の意味が理解できる。	自信がある← 6 5 4 3 2 1 →自信がない
英語B (G)	026	U8	I can use the gerund correctly. 動名詞を正しく使うことができる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	027	U8	I can understand the functions of infinitive. 不定詞の機能を理解できる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	028	U8	I can understand the meaning of the sentences including infinitive. 不定詞を含む文章の意味を理解できる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	029	U8	I can use the infinitive correctly. 不定詞を正しく使うことができる。	6 5 4 3 2 1
英語B (G)	030	U9, U10	I can understand the functions of the adjectives. 形容詞の機能を理解できる。	自信がある← 6 5 4 3 2 1 →自信がない

1 / 2　　実施日　平成20年10月02日（2限目）

Appendix B

英語授業アンケート調査について

宮崎公立大学
PACSプロジェクト

このアンケート調査は、宮崎公立大学の自己評価研究プロジェクト（PACSプロジェクト）の研究の一環として、行われます。このパイロット研究は、皆さんの学習目標の明確化と能力アップ、授業改善などを目的として行われるもので、研究成果は将来宮崎公立大学の自己評価システムや授業展開のための核となるべき要素を含んだものとして位置づけて行っております。

学生の皆さんが記入したデータについては、いっさい成績には関係ありません。また、個人データの保管については慎重に行いますので、個人名の記入もお願いします。このアンケートは英語授業の事前と事後に毎回行います。データの集計は研究補助の学生が行います。研究補助学生から返されたデータは、各自バインダに綴じて保管してください。

皆さんにとって、モーティベーションの維持や学習到達目標の設定と到達結果なども分かり、英語学習の伸びにつながるようなものとして考えておりますので、真剣に取り組んでいただきますようお願いします。

授業の形成的評価の一環であることも付記しておきます。

Grammar Module

英語の文法は、文法規則そのものの習得というよりは、会話・スピーチ、文章読解・文書作成などをスムーズにするものとして身に付けるべきです。ややもすると文法規則を学習し覚えるだけになってしまいがちですが、文法規則を含む英語を獲得することによって、次にどうつなげるかが大切です。そのような視点にたって、このセメスターの自己到達目標を各自記入しましょう。

Reading Module

リーディングは、早く正確に読み取る力が要求されます。ただ、表面的な意味をとるだけでなく、深く主人公の心理に踏み込んだ読みができたり、正確な情報を読み取って他人に正確に伝えられたりするための読解力を養成したいものです。この授業で獲得した技術や方法を、次にどうつなげるかが大切です。そのような視点にたって、このセメスターの到達目標を各自記入しましょう。できるだけ具体的な自己到達目標を考えて、書き込んでおきましょう。

Writing Module

ライティングは、パラグラフの構成をよく知り、シンプルでありながら理路整然と自分の伝えたいことを要領よくまとめて英文を作っていく作業です。Grammar ModuleやReading Moduleで学んだことを活かしながら、相手に分りやすく自分の述べたいことを英文で綴っていく方法を学びます。

ライティングは紙に書いていくものと考えているかもしれませんが、頭の中で伝えたい内容を整理し、英語で考え英文を構成していくことですから、紙に書かず考えた内容をそのまま口に出せば、Speakingになるのです。このことはスピーチやディベートにも通じます。いわゆる、Oral Compositionと呼ばれるものです。日常会話へも広がっていきます。

書いたものを口頭で発表することはライティングのよい練習方法です。本学ではいわゆる会話の授業はありませんが、Grammar, Reading, Writingの 3 つのモジュールを総合的に学習することによって、Speaking能力の向上も図っていこうとするカリキュラムを組んでいます。このことをよく自覚して、学んでいきましょう。

以上のような視点にたって、このセメスターの到達目標を各自記入しましょう。できるだけ具体的な自己到達目標を考えて、書き込んでおきましょう。